

「知的な育ち」を形成する保育実践Ⅱ

横山, 正幸
福岡教育大学 : 名誉教授

<https://doi.org/10.15017/1933262>

出版情報 : 生活体験学習研究. 16, pp.75-77, 2016-07-30. 日本生活体験学習学会
バージョン :
権利関係 :

『「知的な育ち」を形成する 保育実践Ⅱ』

編著者：勅使千鶴・亀谷和史・東内瑠里子
執筆者：金珉呈・木村和子・宍戸洋子・
中村強士・韓仁愛・吉葉研司



本書は、1970年代から80年代前半にかけて取り組まれた著名な三園の保育実践の記録書、「たしかな力を育てる」(和光鶴川幼稚園、明治図書、1984年)、「さくらんぼ坊やの世界」(山崎定人・斉藤公子、労働旬報社、1983年)、「3才から7才までの教育課程」(神戸大学教育学部附属幼稚園研究部、明治図書、1980年)を幼児期の「知的な育ち」の形成という観点から、分析、検討し、その現代的意義を明らかにすることを目的とした研究書である。

ページを開くと、生き生きと活動する子ども達の写真や、数多くの実践事例が引用され、一見とても読みやすそうな印象をうける。しかし、読み進むと、なかなか骨のある本であることがわかってくる。率直に言って、学生など初心者には、やや難しいかもしれない。

しかし、本書は幼児の真の「知的な育ち」を願う研究者や保育現場の指導者にとっては、大変示唆に富む好著である。今日、乳児期から習い事をさせている保護者は珍しくない。経営的理由などからそうした保護者の思いを受けとめ、市販の教材などを使

い積極的に文字教育や英語教育など「知的教育」を行っている保育園・幼稚園も少なくない。そうした現状のなかで「知的な育ち」とは一体どういうことなのか、「知的な育ち」を培うにはどのような保育をしたらよいのか、本書は改めて深く考えさせてくれると同時に、これからの保育・教育のあるべき姿について時代を超え、確かな方向性を示している。

1970年代から80年代前半は、第一次石油ショックを経て高度経済成長が終わり、低成長の時代へ移行していった時代である。幼児を巡る状況にも大きな変化が見られた。「早期教育ブーム」の始まりである。その一つの大きなきっかけとなったのは1971年に出版されたソニーの創業者井深大氏の著書「幼稚園では遅すぎる — 人生は三歳までにつくられる！」(サンマーク出版)である。井深氏は同書の中で大脳生理学の研究を根拠に「どの子ども、0歳児からの育て方ひとつで能力を伸ばしていける」と主張し、早期教育を勧めている。東京では、70年代後半、幼児の塾通いはブームとなった。

本書では、冒頭、保育所・幼稚園での知的な発達を促す保育には3つの立場、すなわち第1に知識の教え込み、記憶中心の、いわゆる「早期教育」の立場、第2に幼児の主体性・自主性を重視し、保育者の指導を極力控える「児童中心主義」の立場、第3に『「知的な育ち」の形成を感情、運動的行為、認識、及び人格等の発達や形成が相互に関わる機能連関的な諸能力の獲得」という幅広い視点でとらえ、保育者の適切な計画と援助・指導のもと多様な保育活動のなかで育つという立場があり、著者らは、この第3の立場に立つものであると述べている。

次に本書の表題である「知的な育ち」とは何であろうか。一般的には文字の読み書きができたり、数の概念が理解できたり、色々なことについて多くの知識をもつようになることだと考えられがちである。これに対して著者らは「①豊かな感受性・感情を持ち、様々な方法で表現できるようになり、②身体認識を深め、自由に使えて表現できるようになり、③自己の認識を深め、様々な手段で表現できるようになり、④他者の認識を深め、対等な関係を築き、集団のなかに自分と他者の存在を位置づけることができるようになること、そして⑤言葉によって、自己・他者、事物や物事を客観的に考え、理解

し、具体的にまた一般的に伝え合えるようになること、である。」と幅広く全人格的に捉えている。

上記3冊の実践記録を研究対象とした理由について、筆者らは三園が当時の社会・時代状況のなかで上述の第3の立場に立って「知的な育ち」を形成するために、すでに際だった取り組みをしていたことを挙げている。

本書の章構成は以下のとおりである。

- 序章 「知的な育ち」の形成の分析視点と1970・80年代前半の社会・時代状況
- 第1章 和光鶴川幼稚園著「たしかな力を育てる」にみる「知的な育ち」を形成する保育実践に学ぶ
- 第2章 山崎定人・斎藤公子著「さくらんぼ坊やの世界」にみる「知的な育ち」を形成する保育実践に学ぶ
- 第3章 神戸大学教育学部附属幼稚園研究部著「3才から7才までの教育課程」にみる「知的な育ち」を形成する保育実践に学ぶ
- 終章 再び、「たしかな力を育てる」、「さくらんぼ坊やの世界」、「3才から7才までの教育課程」から学ぶ

序章では、研究の目的、著者たちの分析の視点、「知的な育ち」など本書のキーワードの定義、当時の保育・教育をめぐる社会状況、三園の実践記録を研究対象とした理由について丁寧に説明している。第1章、2章、3章ではいずれも第1節で園の概要と特長を紹介し、2節以下では各園の代表的な実践事例を引用し、「知的な育ち」を促す保育が実際どのように取り組まれたのか分析・考察している。それらの内容について具体的に紹介したいが、紙幅の都合上出来ないのが惜しい。終章では、三園それぞれについて実践の特長を整理し、そこから学ぶことを次のようにまとめている。

和光鶴川幼稚園の実践では、「知的な育ち」の対象は、基本的な生活と総合学習と課業で、その育て方のポイントは「①子どもの認識形成を年齢に合わせた指導方法で系統的に行うこと、②子どもの体験を大切にすること、③話し合いを大切にすること、④発達段階の特長と教育課程を実践に反映すること、⑤誰でもできることを基本に、幼児期につける力を追求すること、⑥子どもの自発性は社会的につくら

れるため、教師が意図的に知的な好奇心や行動を誘発するように働きかけること」であった。

さくらんぼ保育園の実践では、「知的育ち」の対象は、日常生活・あそび、認識・表現（ことば・絵）活動および人間関係（集団づくりの前段階）で、その育て方のポイントは「①心地よい環境（太陽、土、虫や動・植物）の下で動き回るようにし、その刺激によって『人間の土台』となる感性を育てる、②見る、聞く、触る、なめて味わう、臭いをかぐことにより感覚神経を育てる、③手、足、全身を動かし運動神経を発達させる、その上で④年長児に語り聞かせをする」ことであった。

神戸大学教育学部附属幼稚園の実践では、「知的な育ち」の対象は、基礎的な経験活動と総合的な経験活動で、その育て方のポイントは「①基礎的な経験活動を『経験の系列として扱うもの』と『内容の系統性、順序性等を考慮して扱うもの』とを分化させる、②言語、数・量・形、体育その他自然、社会に関するもの、音楽リズムに関するもの、造形的なものは、3歳から7歳までを通して順序性、段階性、系統性を整理して実践をする、③保育の組み立てを工夫すること、④子どもの主体性を重視する、とくに幼児が自ら選んで行う経験や活動を重視し、環境や準備を整えて存分に満足感を持たせるように配慮すること」であった。

本書では、三園の実践内容は表現の違いこそあれ、基本的には著者らの考える「知的な育ち」を形成する保育・教育と重なるものだと評価、結論づけている。しかし、これはある意味では当然の結果であるかもしれない。なぜなら、そのことを仮定して、この3園を研究対象としたのであるから。

最後に、これは全く筆者の個人的な興味・関心であるが、30年以上前こうした保育・教育を受けた子ども達、例えば、さくらんぼ保育園の実践事例の中に何回も登場してくるアリサちゃんは、その後どのように育ち、どんな大人になったのだろうか、知りたいと思った。筆者は発達心理学を専門としている。三園の実践の結果を幼児期に限って見るのではなく、長期的に追跡することができれば、その現代的意義をより明確にすることができると思われるからである。

なお、本書は2013年に出版された『「知的な育ち」

を形成する保育実践Ⅰ』の続編である。

[新読書社、2016年、2,200円+税]

(福岡教育大学(名誉教授) 横山正幸)